マンテーニャ作《パルナッソス》
― フランチェスコ・ゴンザーガ侯の関与をめぐって ―

慶應義塾大学　神谷 久美子

マンテーニャ作《パルナッソス》（1497 年、ルーヴル美術館）は、マントヴァ侯フランチェスコ・ゴンザーガと妃イザベッラ・デステの居城、サン・ジョルジョ城内に設けられた「ストゥディオーロ」の改装に伴って発注された 5 点の絵画群の第 1 作に当たる。ストゥディオーロとその装飾に関する現存するドキュメントがいずれも妃イザベッラに属するものであることから、先行研究はイザベッラによる「調和の誕生」（Gombrich,1963）、「諸学芸、特に音楽の擁護」（Lehmann,1973; Fenlon,1981）、「美徳の称揚と貞潔の勝利」（Lightbown,1986）等、イザベッラを中心とする解釈を提示してきたが、一方、「エロティックな含意のある飄軽」（Barolsky,1978）とする主張もあり、本作品の解釈を巡る論争は未だ終結していない。たしかに、画面中央の岩上に並んで立つウェヌスとマルスをアポロ率いるムーサたちの輪舞と統合する情景は、一見、若き妃の注文による絵画に相応しく思われる。しかし、本作品に含まれる、神々の不貞の物語を前提とする憤怒のウルカヌスの性器を吹き矢で狙う有翼の童子や、甲冑に身を包む武装するマルスなどの図像は、イザベッラを中心とする従来の解釈では説明しきれない。

本発表は、このストゥディオーロの改装にイザベッラよりもむしろ、先行研究が見落としてきた、夫フランチェスコこそ深く関与していた可能性が高いことを示し、フランチェスコの意向が《パルナッソス》にも反映しているという観点から、本作品の新たな解釈を提示する。

当時、フランチェスコは仏王シャルル 8 世のイタリア侵攻による戦争にフォルノーヴォの戦い（1495）で勝利し、優れた武人君主としての名声を獲得し、同時に「全イタリアの解放者（Universae Italiae Liberatori）」として自らを称揚するキャンペーンを展開していた。北イタリアの小都市国家君主として戦争に従事し続けたフランチェスコは、《カエサルの凱旋》、《勝利の聖母子》、さらに郊外の幾つかの宮殿造営および装飾計画が示すように、芸術擁護にも、研究史が言及する以上の情熱を有していた。既に祖父ロドヴィーコによって「カメラ・ピクタ」や小礼拝堂が設置されていたピアーノ・ノービレに置かれたストゥディオーロは、改装にあたって、ウルビーノのモンテフェルトロ公の例に倣い、君主の教養を示すと共に政治的プロパガンダのための、半ば公的な機能を担う装置として、フランチェスコの指導の元で構想されたと考えるべきであろう。

以上の観点から《パルナッソス》をみるなら、上記の特異な表現に、戦う君主フランチェスコのイメージの反映を指摘することができるだろう。《パルナッソス》は、妃イザベッラとの連携により、文武両道に秀でた君主夫妻によって統治される理想的世界なのである。